



ギルド



川崎ゆきお

町に入ると、男が寄ってきた。

「ギルドに入らないかい」

「ああ、いいです」

「見れば貧相な旅人のようだが、もう少しましになりたくないかな」

「まして？」

「裕福にさ」

「はい、できれば」

「じゃ、ギルドに入りなさいな。一人旅じゃ、効率が悪かろう。狩れるモンスターも雑魚ばかり、大物を狩らないと、大物になれないよ」

「いや、いいです」

「丁度メンバーが足りないんだ。歓迎するよ」

「いいです」

冒険者は一膳飯屋でご飯と味噌汁を頼んだ。

「さっきの冒険者さんだね」

恰幅のいい親父が話しかけてくる。

「どうしてそれを」

「うちのギルド員が声をかけたらしいが、断ったらしいねえ。わしはギルドの長だ」

「あ、それはどうも」

「どうして、断ったのか、理由が聞きたい。いや、もう勧誘はしないから、参考までに、意見が聞きたいだけだ」

ギルド長は、飯炊き女に、何やら符丁で注文する。

「どうだ。聞かせてはくれまいか」

「ああ、一人のほうが気楽でいいので」

「欲がないと」

「ありますが、人間関係が面倒で」

「そこかね。やはり」

「旦那さん。鰻重です」

飯炊き女が、鰻重を運んできた。

「まあ、食いねえ。お礼だよ。ただで聞くのはなんだからな」

「そんな大事な情報じゃないですよ」

「ギルド経営も大変なんだ」

「はい」

「経営者だからね」

「はい」

「で、ギルドに入らない理由は、それだけかい」

「だって、ギルドに入ると、下っ端でしょ。全部先輩だし。居心地が悪いです」

「わしも、昔はそうだった。だから、自分でギルドを起てたのだ」

「そうなんですか」

「まあ、蓋を開け、鰻丼を食べなよ」

「はい」

旅人は鰻重の蓋を開け、ウナギとご飯にがぶついた。

「美味いかい」

「はい。すごい御馳走です」

「うむ、ギルド長だからね。これぐらいのものは、いつでも食べられるし、人にもおごれる。いい暮らしだ」

「はい」

「はい、はいって、受け答えを聞いていると、あまり人付き合いが上手じゃないねえ」

「はい」

「他にギルドに入りたくない理由はあるかい」

「同じ町にいないと駄目です。これが駄目なんです。旅をしたいので」

「この町のギルドでは、いろんな場所へ出かけるよ。みんなで旅しながら、狩りをするんだ。一人じゃ仕留められないような、大物モンスターをみんなで狩る。報酬は膨大だ。一人でやるより、うんと効率がいい。それに疲労度も違う」

「はい、知ってます。大きなギルドのハンター達が、狩っているのを見ました。賞金がかかっているモンスターでした」

「そうだろ。だから、分け前は、一人で狩るより、うんと多い。だから、ギルド員は裕福だ」

「でも」

「分かってるさ。心配なのは、人間関係もそうだろうけど、ギルド戦に巻き込まれないかってことだろ。同業のギルドとの争いが、最近多くてねえ。モンスター狩りどころじゃなくなっている」

「やはり」

「まあ、実情を話すとそうなんだ。あんたがギルド向きではないから、内情が言えるんだ。本当はモンスター狩りじゃなく、ギルド戦で先鋒に使いたかったんだ。先鋒ってのは、一番前だ。盾だよ」

「団体戦も大変ですねえ」

「今じゃ、わしは狩にもギルド戦にも出ておらん。司令長官でもあるからね。町から命令を出すだけだ」

「はい」

「ちょっと愚痴ってしまった。まあ、ギルドの勧誘には気をつけるんだな」

「鰻重御馳走様でした」

「ああいいよ。要するに愚痴の聞き賃だ」

「じゃ、僕はこれで」

「もう行くかい」

「はい」

「あんたはいいねえ。気楽で」

「でも、貧しいです。モンスターを狩って暮らしていますが、宿賃と食事代だけで目一杯です」

「ああ、わしもそんな時代があった。その頃のほうが、良かったかもしれん」

「はい、親方さんも御達者で」

二人は、そこで別れた。

了